

へ移ると同時に、急に、到底私が近づくとくもなく飛離れた処へ持つて行かれてしまった気がして、妙に心細い寂しさを覚えた。

この晩の人が、令妹露女さんだつた事は、後になるとすぐ解つた。

秋 風 に 咲 く 山 吹 や 鏡 立

銀 の 色 紙 掛 け て 朝 顔 活 け し よ な

妹 来 て 婢 の 髪 結 ふ や 花 芙 蓉

これ等の句で、露女さんの在ることはすでに知つてゐたのだつたが、その露女さんが、さうした姿で私の眼の前に現れやうとは考へなかつた。尤も、この折の露女さんは、外出からでも歸つた処を、格子が開いて女中も見えず、そのまゝ、玄関へ出たといふわけだつたらうが、此方が初めての訪問だつたから酷く面喰つてしまつたので、初対面といふものは何かにつけて面白いものだと思ふ。

二

やがて、浜町へは二度三度と伺ひ始めた。何時も夜分だつた。苔雨君、よしを君など、大抵一緒に、ぼつ／＼「曲水」の編集や雑務のお手伝ひをした。同時に既に私達の間に始めてゐた寒燈会も土曜日の夜毎開いて句作した。そのうちに、地球子君は家の都合か何かで出席が稀になり、大体、苔雨、よしを、樹人、杏錢子と私の五人が交らぬ顔触れになつた。

秋が更けたある晩だつた。苔雨君、よしを君と一緒に杏錢子君を訪ねた事があつた。杏錢子君は生憎不在だつた。で、其の辺

をぶら／＼してもう一度訪ねてみたが、まだ戻つてゐなかつた。夜は更けたし寒くはあるし三人とも弱つたが、四人で食べやうとして買つて行つた焼芋の新聞紙包を抱へてゐたので、何処に乘込むにも都合が悪くて、仕方なしに大きな包を抱へたまままたぐる／＼歩いてゐる中に、偶然、虎の門の琴平宮の前へ出た。で、人気のない境内へ入つて行つて、寒いベンチの上へがっかりして腰を下ろすと、間の抜けたお月さまを見上げながら、もういゝ、加減冷たくなつた焼芋をぼそ／＼三人で食べた。

三

浜町へは何ふ度が重なるにつれて、先生との親しみも自然増して来た。

私達は、いつも玄関からすぐ左へ折れた六畳の座敷へ通つて仕事をした。先生の机もそこに置いてあり一間の床があつて、一方の欄間には、左衛門先生が丹波の泊雲居に滞在中先生へ寄せた消息が細長い額に仕立て、懸けてあつた。いつもきちんと片附いてゐるのを、私達は茶の間から幾つも机を出して貰つて一ぱいに散らかしながら、原稿の整理とか浄書とか、印刷所から雑誌が届いた日には、露女さんも女中さん達も交つて総出で包紙に雑誌を包んだ。水中花を咲かせる藍手の皿がきまつて切手の糊を濡らす皿になつた。そんな晩は雑誌の出来上つた歓びもあつて、知らず／＼夜を更かすのが常だから、私達もその時々々の御馳走になりながら、何時までも談笑してゐた。その折々の心持は、どう書き現しやうもないけれど、何時までも忘れず楽しいものだつた。